

重源上人生誕900年記念コラム

佐波川と重源上人

まもる君



今年は、佐波川流域の発展の礎を築いた俊乗房重源上人（しゅんじょうぼうちようげんしょうにん）の生誕900年にあたります。重源上人は平安時代に奈良の東大寺再建のため佐波川上流の滑山から木材を調達するために朝廷から派遣された方で佐波川を使って木材を運搬したことで知られています。

そこで「佐波川水系流域治水プロジェクト」を考えるにあたり、上人の功績と足跡を振り返りたいと思います。

（しゅんじょうぼうちようげんしょうにん） 1121年生誕－1206年没
（享年86歳）
宋（中国）に3度も渡り、
仏教や土木建築技術を学ぶ

俊乗房重源上人



重源上人は、平安時代末期の源平の争乱で焼失した東大寺の再建のため、65歳のときに周防国国司（今の知事）として防府にやってきました。

そして、佐波川上流の徳地の山奥に分け入って巨木を切り出し、佐波川を使って瀬戸内海まで運搬するために、河川の浚渫を行ったり、川の水かさを増すための関水※（せきみず）を造ったり、河口部で2本に分かれていた川の一方をふさいで一本の流れにしたりと数多くの事業を行いました。佐波川ではじめて大規模な治水事業を行った人といわれています。

また、上人は作業員の心身のリフレッシュのために石風呂を設けるほか、建築物では周防阿弥陀寺の建立や徳地にある月輪寺（県内最古の木造建築）の建立も行うなど、佐波川流域の経済、福利厚生、仏教信仰などの分野に大きな功績を残しました。



現存する関水（徳地）

関水とは？

今から約800年の昔、広い道路はありません。切り出した材木の運搬は河川を流すほか無く、たいへんな苦勞が伴いました。

関水とは、川の水の浅いところに堰（せき）を設けて水嵩を増した水路のこと。佐波川各所に118箇所も造られたと伝えられていますが、その多くが洪水などにより破壊され、当時の面影があるものは1箇所のみが現存しています。



上人が去った後も徳地の木材はその質が良かったため、引き続き京都や県内の寺社建立の材料としても使用されました。

そのため、関水も一過性として作られたものではなく、その後もずいぶん木材の搬出に使われていたようです。

この関水はその後、佐波川流域の田畑の開発により、堰の一部として使用されていくこととなりました。

（次回は今に残る重源上人ゆかりのスポットを紹介します）



3分 グレイクタイム

佐波川の由来

巨木伐採の職人から「魚を食べていないので精が出ません」と言われた重源上人が、そばにあった木片に「鯖」と書き、祈禱を行って川に投げると、木片はたちまち鯖になって泳ぎ始めました。これをとって食べると本当に鯖の味であったことから、この川を「さばがわ」と呼ぶようになりました。という伝説があるそうです。

もっと詳しく知ろう！



おいでませ山口
俊乗房重源上人の紹介
山口県観光連盟

<https://www.oidemase.or.jp/tourism-information/spots/12142>



時を超えた夢工房
重源の郷

<http://www.chogen.co.jp/>



佐波川と重源上人
国土交通省

https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon.kawa/0707_sabagawa/0707_sabagawa_01.html